



「5W 1H」

僕の3歳年下の妹がワシントンD.C.で暮らしていた四半世紀前、孫娘の通園する幼稚園に僕の父親が参観に出掛けます。

1から順番に数字を書く練習を

眺めていると、彼女だけが「3」を左右反転して書いています。ギリシア文字で「5」を意味する「ε」と似た具合に。「そうじやないよ」。日本語で「注意」すると、

年若い先生は微笑しながら父親に目配せし、孫娘に尋ねました。「これは何という数字なの?」。

「スリー」と答えると、「じゃあ、他のお友達が書いたのも見せて貰いましょうね」と促し、「あら、

貴女とは違ふみたいだけど、どちらがスリーかしら」と言葉を継ぎます。もちろん正解は私よ、つてな反応を示すと、先生は携帯用化粧用具をバッグの中から取つてきて、紙の前に置きました。

「あら、不思議だわ。鏡の中に映っている数字、今度は皆と同じね」。そう述べながら、以下の内容を論じたのでした。「貴女のお爺ちゃんが『違ふよ』と呟いたのは、日本でも米国でも他の国でもスリーは『3』と記すからなの。馴染めないと感じるかも知れないけれど、それは貴女がもっと大きくなつて、こつちの方がスリーに相応しいんじゃない、と皆に提案出来る時まで待ちましょうね」。

オックスフォード大学で「日本学」を学び、ゴールドマン・サックスのアナリストから社寺殿堂の補修を請け負う小西美術工藝社の社長へと転じた、小生と同じく毀誉褒貶喧しき畏友のデイヴィット・

ド・アトキンソン氏が「朝日新聞」電子版で、『日本人が語る「日本」は理想論 アトキンソン氏の違和感』と題するロングインタビューに答えています。

曰く、東京オリパラ競技大会組織委TOCOGの有識者懇談会で一人の委員が「二神教の海外と異なり多神教の」日本は世界一寛容な国」と発言したが「これは学問的に正しくない俗説」。「寛容な面も沢山あるが、夫婦別姓も認めないし、移民にはかなり厳しいし、難民は受け入れれない。色んな人の意見を排除はしないが、多くの場合取り入れもしない」。

「人間というのは勝手な思い込みをする生き物なので、それをなくす為に大学教育が発達した」の「思い込みで発言した学生に根拠は何ですか? 評価に客観性はありますか? と聞いて答えさせる先生との遣り取りが日本の大学にはない」。

「仮説を立てて、ロジックを分解し、データで検証し、結論を導き出すクリティカルシンキング(批判的思考法)が出来ていない」。「だから日本は事後対応しか出来ず、いつも後手に回る。事前に仮

説を立てて議論しても受け入れられず、予想は出来るのに何も手を打たない。アナリストとして関わった銀行の不良債権問題もそうでした。いくところまでいかないと、変わらない」。

当連載でも繰り返し述べてきた「WhyやHowを教えず学ばず考えず」、「自分で考え・自分で語り・自分で動く気概も稀薄な日本社会」。「孫子」や「北斗の拳」を援用する迄もなく、「戦う前に既に負けている」のです。

「東京五輪が日本経済の起爆剤になるというのも俗説。エビを食べる長寿にあやかるのと同じ。数週間のイベントをやつても、やらなくても、GDP550兆円の日本経済には中長期的にはさしたる影響はありません」とも、託宣する彼は昨年来、内閣府「成長戦略会議」委員でもあります。

衆参補選投票開票日の4月25日午後、「説明出来る事と出来ない事がある」「その批判は全く当たらない」第99代内閣総理大臣と57分間、公邸で2人で懇談した際にも同様の「進講」を行ったのや否や、次回お目に掛かった際に尋ねてみようと思います。

★次号の月号の発行口は5月28日(金)です。